

東京オリンピック・パラリンピック時に役立つ 必須英語表現テキスト作成 —スポーツボランティアを対象に—

大和久 吏恵*
カレイラ 松崎順子**

抄録

2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、英語を使用するスポーツボランティアの育成が必須である。よって、本研究では体育大学の学生を対象にした英語の教材を作成し、それらの評価を行った。さらに、それらを改善するため、2018年2月に韓国で開催された平昌オリンピックにおいてボランティアに関する調査を行った。研究1では女子体育大学生203名を対象に英語の教材を作成し、その効果を調べた。その結果、「授業の楽しさ」「役立ち」「満足感」に関して、肯定的な評価を得ることができた。研究2では、これらの英語教材を発展させるため、平昌オリンピックにおけるボランティアの英語コミュニケーション養成に関する調査を行い、さらに、平昌オリンピック開催時には現地へ赴き、様々な場所に配置されていたボランティアにインタビューを行った。その結果、語学要員として採用されたボランティアは流暢に英語を話すことができたが、その他のボランティアはほとんど英語が話せないことが明らかになった。よって、2020東京大会においては、どのようなボランティア要員も場所・空間・依頼に関するシンプルなコミュニケーションを取れるような教育・トレーニングを行うことが必要であり、テキストも上記表現を含めて作成することが必要であることが示唆できるであろう。

キーワード：オリンピック、ボランティア、体育大学、英語、テキスト

* 日本女子体育大学 〒157-8565 東京都世田谷区北烏山 8-19-1

** 東京経済大学 〒185-8502 東京都国分寺市南町 1-7-34

Development of Textbooks of Essential English Expressions

—Education for Sport Volunteers—

Rie Owaku*

Carreira Junko Matsuzaki **

Abstract

Volunteers for the 2020 Tokyo Summer Olympics and Paralympics should be trained in the use of English. To this end, we created learning materials for students majoring in physical education and conducted research on volunteers at the 2018 Winter Olympics, which were held in Pyeong Chang. In Study 1, we created and evaluated materials designed for students majoring in physical education. 203 students of a women's college of physical education were selected to participate in the survey. They were required to evaluate the study materials in depth in terms of fun, usefulness, and satisfaction. In Study 2, we accomplished a research inquiry on the English language training for volunteers and interviewed volunteers at the 2018 Winter Olympics so that we could further develop the learning content. The volunteers who were accepted as language experts could speak English fluently. However, most of the volunteers we interviewed hardly spoke any English. Thus, it is our suggestion that all volunteers should be taught basic English expressions to address common requests pertaining to location, space, and other essential topics, and that these expressions should be included in the English language training textbooks.

Key Words : Olympics、volunteers、college of physical education、English、textbooks

* Japan Women's College of Physical Education 8-19-1 Kitakarasuyama Setagaya-ku, Tokyo, 157-8565

** Tokyo Keizai University 1-7-34 Minami-cho Kokubunji-shi, Tokyo, 185-8502

1. はじめに

2020年東京オリンピック・パラリンピック（以降、2020年東京大会）に向けて、国際的スポーツイベントの運営・競技知識のある東京の体育・スポーツを専門とする大学生およびその関係者は、開催準備期間からオリンピックを支えるスポーツボランティアとして中心的役割を果たすよう要請されるのは必至である。過去の開催例に違わず、2020年東京大会でも海外からの選手・関係者・観光客の来訪に備え、英語が使えるスタッフが大量に必要となる。そこで、英語が使える体育・スポーツを専門とする大学生を、ボランティアスタッフとして早急に育成する必要性が高まっている。

1964年の例から鑑みて、2020年東京大会でも上記の条件を満たす大学生がスポーツボランティアとして招集されると知った時より、筆者はスポーツに関連付けたオリジナル教材を作成し、勤務先大学での授業で使用している。事前事後アンケートの結果や体育教員のアドバイスを元にして、教材の発展・改善をはかり一定の成果を挙げてきた。

毎年学生調査を行っている、2020年が近づくにつれ、体育・スポーツに興味を持つ大学生の間でも全体的に英語学習熱が高まっているのが数値に表れている。そこで、国際スポーツイベントにおけるボランティアの使う英語やその言語レベルを実際に把握し、さらに効果的な教材を作成することで、東京大会におけるボランティア育成に貢献したいと考えている。

2. 目的

2020年東京大会に向けて、英語が使えるスポーツボランティアの育成が必須である。観光分野の英語教育と同様、スポーツイベントを支えるボランティア対象の専門英語教育も必要である。そこで、まずは筆者勤務先の体育大学で作成した教材を発展させ、体育・スポーツに興味を持つ大学生を対象とした必須英語表現テキストを作成するための調査を行う。加えて、英語教育先進国である韓国で開催される平昌オリンピックに向けた教育プログラムと、オリンピックにおけるボランティアの英語使用状況を把握するための調査を行う。この2つの調査を行うことで、テキスト作成と合わせて東京大会の教育プログラムに示唆を与えるのが本研究全体の目的である。

3. 研究1：

スポーツボランティアを対象とした必須英語表現 テキストの作成・発行に関する調査

3. 1. 背景

一般的にボランティアに必要な英語技能は、能動的に聞いたり発言したりするコミュニケーションの技能である。しかし筆者が体育大学に赴任した2013年当時、体育・スポーツを専門とする大学生用のコミュニケーション教材は存在しなかった。研究の方では2010年を過ぎると体育大学生の英語学習について発表されてきている（吉重2012, 大和久ほか2014, Elmes2015など）ので、これから同分野のコミュニケーション教材が出版される流れにはなっている。

そこで筆者は2～30分を目安として授業の導入時に使用するA4用紙1枚の教材作成に着手した。2015年度はスポーツに関連するファンクションベースのパイロット教材を作成した。トピックは身体・スポーツ用品の買い物など体育分野に関連するものを選択し、James Asherの提唱するTotal Physical Response（全身反応教授法；TPR）を意識して10回分の教材を作成し、授業で使用した。この教材は基本的に、1) トピックに関連した表現の学習（Shoppingであれば、on the corner of the shelf など）、2) 学習表現を含んだモデル会話の理解、3) ペアワークとしてモデル会話を応用した会話作成・練習の3部構成となっている。コミュニケーションに焦点を当てた事前事後アンケートの結果、効果が見られたため、翌年の改訂を前提に数名の体育系教員にアドバイスを仰いだ。

アドバイスを基に2016年度はサッカー・陸上競技など、小・中・高校の体育授業で習い、かつオリンピック競技に採用されているスポーツを選択し、8回分のパイロット教材を作成した。この教材は基本的に、1) スポーツに関連した表現の学習（Soccerであればdefender, shin など）、2) スポーツに関する短文の理解（Each soccer team consists of 11 players, one of whom must be the goalkeeper.から始まるsoccerの概要を50語程度でまとめたもの）、3) 頻出の表現と動作を伴う句の理解（headingを説明する句を選択肢から選び、動作をする）、4) ペアワークとして質疑応答の4部構成となっている。再び体育系教員にアドバイスを求めたところ、両者折衷の教材が良いという結論が出たため、2017年度は2020年東京大会を見据えたボランティアとしてのコミュニケーションも学習でき、両者折衷の教材を作成することにした。

2017年度作成の教材は、90分授業1回でも複数回

の授業で分割しても使えるよう、A4用紙4枚で作成した。基本的には、1) スポーツに関連した表現の学習 (Table Tennis であれば stroke, spin など)、2) スポーツに関する短文の理解 (Table tennis was started by Mr. James Gibb in England. から始まる table tennis の概要を 50 語程度でまとめたもの)、3) 穴埋めによる頻出表現の定着 (“Bend” your knees and crouch your body. *bend を解答)、4) 質疑応答 (table tennis 関連では Do you know famous Japanese table tennis players? など、ボランティア関連では How can I get to Narita Airport from Tokyo Station? など)、5) 学習表現を含んだモデル会話の理解と練習、6) ロールプレイ作成、7) 振り返りの、7部構成となっている。

3. 2. 調査対象者・方法

調査対象者は、都内女子体育大学で英語 I・II (必修) を履修している 203 名の学生である。調査は 2017 年 9 月末、後期授業初回に行った。授業後に本研究の目的である「体育およびスポーツに興味を持つ大学生対象の必須英語表現を調査・収集した冊子の作成」のためのアンケート調査を行う旨を説明し、教材は上記で紹介した Table Tennis を使用した。1. 卓球に関する授業は楽しかった、2. 卓球に関する授業は役に立った、3. 卓球に関する授業で自信がついた、4. 卓球に関する授業は満足感が得られた、までの 4 項目を、「当てはまる=4」「やや当てはまる=3」「やや当てはまらない=2」「当てはまらない=1」と数字でアンケート用紙に回答させ、5. 卓球に関する授業への感想を自由に書いてください、の 5 項目目については、筆者にメールで感想を送らせた。回答は成績に関係せず、回答の有無も自由であることも併せて説明したところ、190 名から回答を得られた。なお 1 授業 (90 分間) でアンケートまで終了させるため、6) ロールプレイ作成と 7) 振り返りは割愛した。

3. 3. 調査結果

対象学生はアンケート用紙に記載された項目に回答した。集計結果は以下のとおりである。

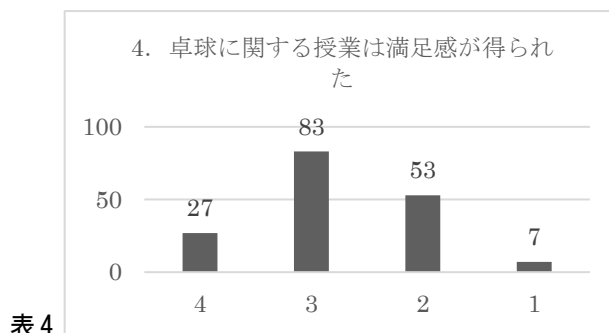
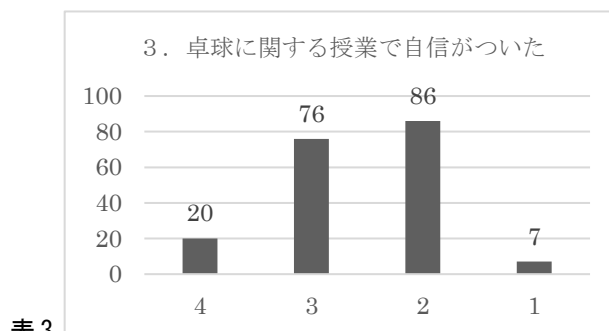
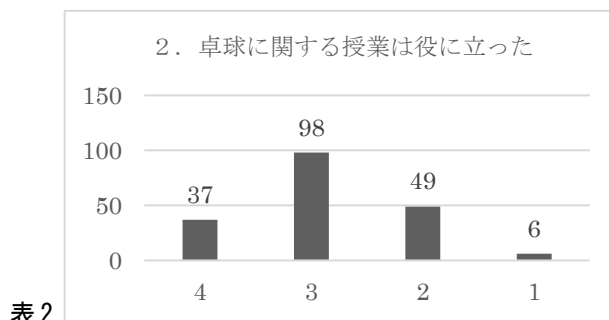
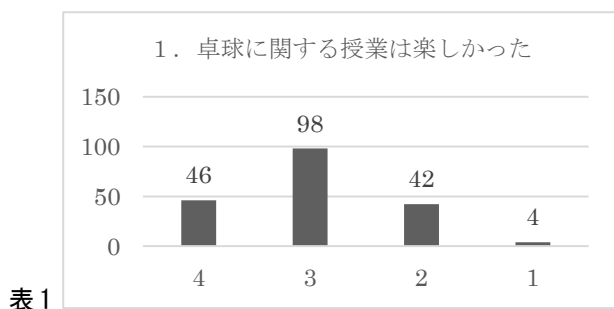


表 1・2・4 にあるように、「授業の楽しさ」「役立ち」「満足感」に関しては、肯定的な評価を得ることができた。メール回答から得られた代表的な意見としては、「卓球についての英単語や歴史について英語で知れてよかった」「内容がスポーツだったので、身近に感じて卓球の内容へ取り組みやすかった」など、競技と英語学習の組み合わせが学習意欲の向上に結び付いたという結果が得られた。また、「卓球のことでなく、海外の人とコミュニケーションをとるための簡単なフレーズも学べて良かったと思う」「ボランティアとかの会話がなかなか難しかったけれどこれを覚えて使うことができれば外人の人と話せると思うのでしっかり覚えてこれから使えるといいです」など、ボランティアとしてのコミュニケーション要素を含めた英語表現の部分も、競技と関連させて提示すると学習の相乗効果が得られることがわかった。

しかし表 3 の「自信」に関しては肯定と否定が拮抗した。これはメール回答によると「英文を訳す問題はもう少し難しくてもいいなと思いました」「英語のレベル的には難しくなかった」など、教材が易しく感じた

学生にとっては既知事項を学習したこととなり、自信や英語運用能力の向上とは結びつかなかった。また、「やっぱり英語は苦手だなと感じた」という英語学習への苦手意識を払拭できない学生や、「自分がやっているスポーツではないため、少し分かりづらく、理解しにくい」といった（卓球という）競技に興味もなく学習意欲も湧かなかったという学生にとっても、自信の向上に影響することはなかった。

4. 研究 2 :

平昌オリンピックに向けた韓国における ボランティア教育に関する調査

4. 1. 背景

韓国では国の教育政策として英語教育が重視されてきた。英語教育が国家政策の 1 つになった背景には、文民出身の金泳三大統領政権（1993～98）のもと、国家目標として「世界化政策」が掲げられたことに端を発する。さらに、金大中大統領は、世界化に備えた英語教育の徹底化、国際社会に対応できる人材の育成、留学の自由化に重点をおいた教育政策を推進した。このように、金泳三、金大中両政権の国家政策によって現代韓国社会では英語教育が重視され、最も力を入れている教育政策の 1 つとなっていた（カレイラ、2014）。

4. 2. パゴダが提供するオンライン英語教育

平昌オリンピックのボランティアは、2 万 2400 人の募集に対し、国内および 145 か国から計 9 万 2 千人の応募があり、競争率は平均 4.1 倍となったそうである。公式サプライヤーであるパゴダ教育グループは、「オリンピック用に開発したオンライン言語教育プログラムを国内外すべてのボランティアを対象に実施する」と発表していたため、羅玄妃氏（現地協力者）を介してメールで教育内容に関する質問を行い、回答を得ることにした。

まず、オンライン英語教育の内容は次のように区分されている。基礎英会話は 5 章 132 Unit から成り、各 Unit では family や time など非常に基礎的な語彙・表現を学習できるようになっている。初級英会話は 4 章 102 Unit から成り、各 Unit では頻出動詞（make, have, come など）や、慣用表現を学習できるようになっている。リアルオリンピック英語は 2 章で職業編が 36 Unit、会場編が 13 Unit あり、大会案内、運営支援、試合、メディア、各会場の詳細などが学習できるようになっている。

次に、パゴダへの質問と回答を以下に挙げる。

質問：

1. ボランティアの語学（英語）到達目標について。TOEIC、TOEFL、CEFR など民間の英語力テストを参考にしているか。参考にしていないとしたら、独自の到達目標があるか。
2. ボランティアの語学（英語）レベルについて。基礎・上級・外国人と分けて教育するそうだが、教育前のレベルと、教育後に目指すレベルはそれぞれどのくらいか。
3. 教育する具体的な内容は何か。例：道案内、スポーツ専門用語、医療サポートなど。
4. 実習はどのような場所で何時間くらい行う予定か。

回答（羅氏による翻訳のまとめ）：

1. ボランティア志願書に言語能力を上級・最上級と表記した人を対象にテストを行い、その結果に基づきオンライン言語教育コース（基礎英語、リアルオリンピック英語、韓国語）を割り当て、オンライン言語教育履修率およびクイズを通して各コース別に目標到達現状をチェックしている。レベルテスト対象外のボランティアに対しては、公認テスト認定点数と志願書で選んだ言語能力レベルを参考にした。
2. パゴダが提供するオンライン教育は、選択的教育であり履修必須教育ではない。志願者個人が英語および韓国語能力を高めるために、各自が設定した目標によって勉強できるようにコンテンツを提供している。目安として、基礎英語コースを履修し終えたボランティアは、外国語で簡単な案内および秩序を維持するなどのことができるはずである。リアルオリンピック英語コースを履修し終えたボランティアは、職務・担当会場特化英語表現を実際の状況ですぐに活用してコミュニケーションをとることができるはずである。
3. 教育の具体的な内容は、オンライン言語教育プログラムサイトにゲストログインして確認すること。
4. 競技場チーム役割と組織構造および競技場一般情報などの現場教育は現在企画中だが、言語教育関連実習は別途行わない。

以上がパゴダからの回答であった。

4. 3. ボランティアの英語使用状況調査・方法

オリンピック開催時にボランティアの英語使用状況調査を行う準備として、2017 年 8 月下旬に渡韓し、江陵オリンピックパークと平昌アルペンシアを訪問した。

収集した印刷物（パンフレット、地図、地元観光情報など）は、英語のほか中国語・日本語など多言語に翻訳されていた。施設内の案内表示にも英語の表記があった。しかし英語でコミュニケーションが取れた施設内勤務の現地スタッフはごく限られていて、またそのような人材を敢えて配置してはいないとのことだった。この状況を踏まえて、2018年2月下旬オリンピック開催時に再び渡韓し、ソウル駅・江陵駅・オリンピックパーク内でボランティアとの会話を通して英語使用状況を調査した。

4. 4. 調査結果

ボランティアの英語使用状況に関して、開催時に調査した結果を以下に記す。対象者は8名（A～H）、表中数字の表す意味は、①場所、②性別、③（およその）年齢、④質問内容、⑤英語使用状況である。

A

①	仁川第二空港
②	女性
③	前期青年
④	ソウル駅への行き方
⑤	日・英ゆびさし会話表使用、韓国語で対応

B

①	江陵駅
②	女性
③	青年（大学生）
④	シャトルバス乗り場への案内
⑤	流暢

C

①	オリンピックパーク（チケットボックス付近）
②	男性
③	青年
④	チケットの変換方法
⑤	流暢

D

①	オリンピックパーク
②	男性
③	青年
④	マスコットとの写真撮影
⑤	流暢

E

①	オリンピックパーク
②	女性
③	青年（3月より大学生）
④	ボランティアへの応募・教育方法

⑤	流暢
---	----

F

①	オリンピックパーク
②	男性
③	中年
④	TOKYO2020 館への行き方
⑤	途中まで英語、方向指示は韓国語

G

①	オリンピックパーク（アイスホッケー競技場内）
②	女性
③	中年
④	座席の位置
⑤	韓国語のみで対応

H

①	オリンピックパーク
②	男性
③	青年（大学生）
④	ボランティアへの応募・教育方法
⑤	コミュニケーションが取れる程度

まず、前提として、江陵オリンピックパーク訪問客のほとんどは韓国人であり、外国人の数が少なかった。競技場内のボランティアの英語使用状況に興味があったが、ボランティアの数が多く、担当範囲も決まっているため、Gのように韓国語のみでも役目が果たせていた。（ただし、ランゲージサポートのようなボランティアも館内には配置されていて、そのいずれも青年だった。）Eは幼少時より学校教育で英語力をつけたという。ボランティアが決まってからは、オリンピック委員会主催の英語のオフライン教育を10時間、オンライン教育を1時間受けたとのこと。教育時間は担当場所によって違うとも話していた。Hは担当場所がインフォメーションでもランゲージサポートでもないので、ガイドや心構えの教育は受けたが、ボランティアとして英語教育は受けていないと話していた。

調査からわかったことは、実際に英語で対応できるのは大学生およびその卒業生であり、中年以上だと英語で尋ねても韓国語で返答したり、英語を使おうともしないことがある。ボランティアは語学要員として採用されたわけではなく、担当場所によって教育内容が異なる。複雑な内容はランゲージサポートやインフォメーション担当が対応するので、それ以外のボランティアは特に英語教育を受けていないということであった。

5. 考察

訪日外国人数は、1964年当時35万人であり2008年に835万人となるまではゆるやかに増加したが、2012年以降2016年にかけて激増し、2017年におよそ2870万人となった(JTB)。この数字から2020年東京大会には、海外からの観光客が多数訪れるはずである。

誘致のスピーチを英語で行った以上、訪問客は日本のボランティアにある程度の英語コミュニケーション能力を期待するであろう。それは「おもてなし」の一部と言い換えることもできる。韓国語のできない筆者は、AやGのようにほぼ韓国語(開催国言語)のみで対応されたり、Fのように肝心の位置情報が韓国語であったために目的地へ着けなかったりした際、取り残された気持になった。自国語で案内されるために知りたい情報が得られないとき、外国人は疎外感を持ちフラストレーションを感じる。少なくとも「おもてなし」を受けているとは感じられない。

多くの訪日外国人は英語(オリンピック公式言語)で話しかけてくると予想されるので、どのようなボランティア要員として採用されても、少なくとも受け身的な案内の受け答えができるとよい。難解な単語や複雑な表現ではなく、主に場所・空間・(チケット等の提示)依頼に関するシンプルな表現で十分である。表現例を以下に挙げる。

日本語	英語
右にあります	It's on the right.
左にあります	It's on the left.
あちらにあります	It's over there.
右に曲がってください	Turn right.
左に曲がってください	Turn left.
階段を上ってください	Go up the stairs.
階段を下ってください	Go down the stairs.
直進してください	Go straight.
チケットを見せてください	May I see your ticket?
少々お待ちください	Just a moment, please.

いずれも既知で学習するまでもないと思われるかもしれないが、案内時に瞬時に対応できるよう、条件反射的に使えるようになるまでトレーニングを行う必要がある。必須英語表現テキストにも場所・空間・提示に関するこのような表現を取り入れ、より実践的なトレーニングができるようにしたい。そして東京大会の

教育プログラムには、どの講習でもペアワークなどで上記10表現を反復練習する時間を5~10分程度けると効果が得られると推測される。

6. まとめ

本研究の目的は、体育・スポーツに興味を持つ大学生を対象としたテキスト作成と合わせて、東京大会の教育プログラムに示唆を与えることであった。数年前から着手していた教材の作成を進めてきたが、1授業1テーマに絞ったアンケートを行うことで、さらに改善すべき点を把握することができた。そしてアジアにおける英語教育先進国である韓国のオリンピックボランティア教育について調査し、平昌オリンピック開催時には現地で英語使用状況を取材した。これらの調査・取材結果を鑑みると、2020年東京大会では、どのようなボランティア要員も場所・空間・依頼に関するシンプルなコミュニケーションを取れるような教育・トレーニングを行うことが理想であるし、テキストも上記表現を含めて作成することが必要であると分かった。以上が、「東京オリンピック・パラリンピック時に役立つ必須英語表現テキスト作成」に関する報告である。

【参考文献】

- カレイラ松崎順子(2014) 韓国の英語教育における格差とその対策. 東アジアへの視点 2014年3月号. 第25巻1号, 17-25.
- 吉重美紀(2014) Needs Analysis of Athlete in Overseas Competitions: in Cycling and Yachting. ESPの研究と実践, 第11号, 25-34.
- 大和久史恵・山田七恵・加賀岳彦(2014) 学生の英語学習スタイルと所属専攻との関連性. 日本女子体育大学紀要, 44, 83-89.
- David ELMES(2015) Report on the 2013 JUTEN Project: スポーツ競技関連の英語教材の作成. 鹿屋体育大学紀要, 50: 31-49.
- 大和久史恵・カレイラ順子(2016) 大学生を対象とした体育分野ESP教材を導入した授業実践報告. LET関東支部第136回(2016年度)研究大会要項, 32-33.
- JTB 総合研究所
<https://www.tourism.jp/tourism-database/stats/inbound/> [2018年2月25日確認]

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。